

青梅市文化財ニュース

第422号

令和4年12月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

南無阿弥陀仏の槍（天寧寺蔵）

南無阿弥陀仏の槍は、青梅市根ヶ布天寧寺所蔵の武具で、かねてより師岡山城守将景の由来であると伝えられているものです。

師岡将景は三田氏滅亡後、後北条氏の命を受けて師岡城（勝沼城を改称）の城主になった武将です。師岡入城以前は北条氏麾下^{きか}の武将であったという説と三田氏譜代の臣であるという二説があり、北条氏滅亡後は徳川氏に仕えます。師岡城の南東に曹洞宗の妙光院がありますが、妙光院の過去帳に「元和元乙卯年五月七日、於摂州大坂討死、青松院殿前城州使士劔休岡大居士」とあり、師岡将景は元和元(1615)年大阪夏の陣で戦死したことがわかります。その妙光院は、将景の姉・妙光禅尼が開基（寺の創建にあたって経済的な支持を与えた者）で、将景も妙光禅尼の没後、同寺の堂塔再建を行なっています。

それでは、南無阿弥陀仏の槍の詳細について解説します。



穂は素槍で刃長5寸3分(約16センチメートル)、材質は鋼で、意匠として穂に「南無阿弥陀仏」（无は無の異体字）の刻字があります。銘文は表が「天正二十年五月吉日助宗作」裏は「主 関留之助」です。ちなみに明治中期の寺伝にはこの槍について「三田弾正忠政定ノ持具ニテ歴代之ヲ

伝来ス」とあります。政定は生没年不祥のため、登場する文献を参考に活躍時期を推察するしかないのですが、1509～1560年がその時期にあたります。槍の銘にある天正20年は1592年ですので、持ち主としては三田弾正忠政定よりも元和元(1615)年に討死した師岡山城守将景のほうが可能性が高いといえます。

槍の柄は木製、約6尺(189センチメートル)で太刀打には青貝の螺鈿細工の装飾が施され終端には銀製の石突が付いています。なお前出の寺伝には「九尺柄」との記述がありますので後年柄を詰めているかもしれません。また木製の黒漆塗りの槍防具（穂先カバー）が付属しています。





師岡将景が師岡城主になって数年後の永禄 12(1569)年、北条氏と甲斐武田氏の間で大規模な戦闘が発生しますが、武田軍の小田原城攻めの前哨戦である滝山城包囲に将景が北条方として出陣している記録が残っています。「甲陽軍鑑」に、北条氏照が

守る滝山城と多摩川をはさんだ拝島に陣を敷いた武田方との戦闘において諸岡（師岡）山城守なる剛の者が十文字槍を振り回し、武田方の弱冠 24 歳諏訪四郎勝頼と三度槍を合わせ双方一步も譲らず、との記述です。ここでの将景は十文字槍を使っています。南無阿弥陀仏の槍の製作年よりも 23 年前のことですが、若年より槍を得意武器としているのは特筆すべきでしょう。

師岡山城守将景は、元和元(1615)年の大坂夏の陣にて討死しますが、その後、将景の子・采女佐^{うねめのすけ}をはじめ師岡一族は地元に着し現代へ続いています。

(文責 沖 祐昭)



勝沼城跡縄張図 (S=1/3500)

(『東京都の中世城館 (主要城館編)』より抜粋)